【 6 】

氏　　名	山本誠作（やまもとせいさく）
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第108号
学位授与の日付	昭和51年5月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**ホワイトヘッドの宗教哲学**
論文調査委員	（主査）教授 武内義範　教授 武藤一雄　教授 辻村公一

論文内容の要旨

本論文はホワイトヘッドの円熟期の形而上学的思索の核心にあたる部分を詳述して，彼の形而上学が彼の神観（宗教哲学）と密接不可分な関係を有することを論じている。全篇は五章に分れているが，そのうちとくに彼の形而上学の全貌を明らかにしているのが，第一・第二・第三章であって，後の部分，第四章では彼の文明についての考え方が，第五章ではこの文明論との関聯で，宗教一般ならびに仏教・キリスト教などに対する見解が論じられている。第四章と第五章では，これらの章が比較的具体的な文明と宗教の諸現象を取り扱っているので，山本氏の叙述は明るさを増して来ている。この部分は明晰で，また示唆にとむ点で本論のうちでもすぐれた叙述であるということが出来るが，最も重要なのは矢張り第一・第二・第三章であるから，以下では主としてその要点を述べることとする。

第一・第二・第三章の中心は，「現実的有」とホワイトヘッドの称しているもの，すなわち宇宙を構成している最小の経験主体の構造，の問題である。——山本氏はホワイトヘッドの解説書の見解にしたがって現実的有を仮説的概念であるとしている。しかしこの場合仮説という概念が，ホワイトヘッドの立場からすれば彼の批判する感覚主義的認識論にもとづいている不当な意味で用いられていないか，はなお検討を要するであろう。

ホワイトヘッドは当時，相対性理論や量子力学が齎した物理学の方法論に於ける大きな転換の意義を徹底的に追求し，そこに生れて来ている自然認識の新しい理念と，それにもとづく物質観の本質を剔出した。それが「有機体の哲学」という彼の形而上学に発展したのである。この立場では物質と有機体（生命体）との区別はもはや存在しない。有機体は環境的世界をその中心に於て統一しつつ生成する。そのように，現実的有はそれの自己創造的な過程を通じて，さもなければばらばらな諸現実態の多様性であるものを統一性にもたらす。また有機体の統一がその過程を通じて完成せしめられるときに死滅する如く，現実的有の完成も，一つの現実的有が他の現実的有に交替して，それ自身はもはや現実的有ではない過去化した，客体としての有になって了うことである。こうして完成された現実的有は新しい現実的有のための構成要

素の一におさめられて了う。山本氏はこの現実的有の，既往の客体的有を媒介として発展する創造的プロセスを「作られたものから作るものへ」として把えている。

現実的有のプロセスにとってもう一つの重要な側面は，この個物の現実化に於て，永遠的対象が進入してくることである。ホワイトヘッドはこの永遠的対象をプラトンのイデアに対応する超越的な有であるとしている。しかしプラトンでは，実在はイデアの側にあって，現象はそれを分有するだけにとどまったのに対して，ホワイトヘッドの場合は現実的有の過程に重点があって，永遠的対象はこれに対して第二次的な可能態の意味を荷うにすぎない。（山本氏はこれを裏返しにされたイデア論であるとする説に賛意を表している。）それにもかかわらず永遠的対象は――それの於てある――超越的領域を必要としている。山本氏が外延的連続体として本論の最初のところで述べている論理的枠組みの問題が，この関連のうちで重要な意味を帯びてくる。プラトンのイデア説に，アリストテレスがイデアの離在を非難したとおなじような問題が，ホワイトヘッドの裏返しにされたイデア論にもあらわれてくる。それを救う原理として神が彼の形而上学に登場する。

山本氏はホワイトヘッドの神を (1)原初的本性，(2)結果的本性，(3)超えて置かれた本性の三から考察する。第一は現実的有がその生成の過程を永遠的対象と結び合わせて，新しい創造性として実現するとき，そのことの可能性はその都度毎に神が世界をこえながらしかもこれを世界に齎らすことにもとづいている。第二はそのようにして成立した現実的有の個体的内容は，新しい現実的有が登場するとき，単に消滅して了うのでなく，神のうちに摂取されて不死の客体とされることである。こうして一々の創造は，不死の客体として一つずつ世界に新しいものを加えて行く。第三は神の原初的本性と結果的本性は，神が自己を超えて世界に自己を与える働きに統一されていることを意味している。

第二章では，この現実的有の問題が，第一章の宇宙論的観点に対比すると一層主体的に取り扱われる。山本氏は，第一章を巨視的考察，第二章を微視的考察としている。第三章ではこの主体的現実的有の構造が，認識の形而上学として取り上げられている。

論文審査の結果の要旨

ホワイトヘッドの哲学は，米英の哲学界では，今日までつねに傍系に留っているが，一定の移ろいのない支持を得て来た。そして現代に於てはその影響力は，哲学・神学界の両面にわたって，かえって顕著になりつつあると考えられる。しかしわが国に於ては，彼の円熟期の思索を示している「過程と実在」「観念の冒険」「形成途上の宗教」などを中心にして立ち入って体系的叙述を行った著書は見当らないように思う。ホワイトヘッドに関心を有しているわが国の学者も，多くは科学の哲学の面に重点をおき，難解きわまる彼の形而上学の核心に迫り，その宗教哲学を解明する企ては少なかったようである。

しかし最近の米国に於けるホワイトヘッドの研究書は，例えばC・ハーツホーンやM・クリスチャンなど，宗教哲学の側面（神観や宗教観）を重視するものが多く，山本氏もこれらの研究書に多くの示唆をえていることは確かである。とくにハーツホーンには論者は直接の啓発と大きな影響をうけている。このような便宜があったにもせよ，山本氏がホワイトヘッドをこのような綿密周匝な分析によって解釈しうるに至ったのは，氏のたゆまぬ努力の賜である。

本論文は，そのホワイトヘッド解釈に於て，種々の点ですぐれた点があるが，全体としては叙述がなお生硬である。元来難解であるホワイトヘッドの主著の場合，原意の論理的整合性をくずさないで平明な解明を行うということがどの程度まで可能であるかは，疑問であるとしても，またそれが今日まで研究者を彼の形而上学の核心に容易に近づけしめなかった主な理由であるとしても，論者の今後の研究によって，この哲学の深い意味とその価値とが，一層明らかにせられることがのぞまれる。

第一章の後半の神の三つの本性についての考察から，第二章，第三章につづく部分は，論理的関連が比較的よく把えられていて，ホワイトヘッドの哲学の本質がよく示されている。第一章のうちの，「外延的連続体と神」の議論は，「神と創造性」の問題とともに示唆にとんでいる。山本氏が現実的有を解明するために，「作られたものから作るものへ」として（創造的世界の創造的要素とされる）西田哲学の個物の考えを導びき入れてくるのは意味深い視点であると言わねばならない。恐らく晩年の西田哲学がライプニッツに親近性を認めていた如く，ライプニッツの哲学のホワイトヘッドへの影響と両者の比較研究が西田哲学に対するそれとともに行われるならば論者の観点は一層押しすすめられるであろう。

よって，本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。